

新自由主義と現代日本の下位文化 —ブルデュー理論に依拠して—

荒井悠介

1. はじめに

本稿では、現代日本の下位文化（サブカルチャー）に属する若者達の社会観および、彼らがどのような資本を持つことで将来に希望を見出しているのかを明らかにしていきたい。

本稿は、「ギャル」「ギャル男」と呼ばれるような日焼けした肌に明るく染めた髪色をした若者や、水商売のホストやホステスのような恰好、暴力団関係者のような恰好をした若者達。その中でも繁華街をたむろしつつ、自分でイベントを企画運営する「イベサー」と呼ばれる集団に属する若者達の下位文化を論じるものである。この集団に属するメンバーは「サー人」と呼ばれ、これらの集団はその集団同士でコミュニティを形成し、「サークル界」と彼等自身が名付ける独自の社会を作っている。本研究は、このサークル界への参与観察と、イベサーに所属している若者への詳細な聞き取り調査を通じて、彼らの文化と生活、その価値観と社会との関わりを考察していこうというものである。

2. 本研究の対象及び手法

本研究の対象は、東京都の渋谷センター街を主な活動拠点としていたイベサーに加入していた者達である。筆者は1998年からこのシーンに参加し、2001年からは渋谷のサークル界に属するようになった。2003年までは当事者として関わり、自らが「卒業」した2004年以降は調査者として参与観察とインタビューを中心とした定性調査を2016年現在まで行ってきた。本論文は、そこで行ってきた聞き取り調査とフィールドワークを基にして書かれたネイティブエスノ

グラフィーである。なお、調査にあたっては2004年以降いずれの対象、立場においても、自らの立場を研究者として伝えることを心掛けた。また、インタビュー資料として使用する際には本人からの許諾を得ている。ただし、本研究では、研究倫理の側面から研究内容に支障がない範囲で個人、団体の特定ができないようにデータを加工していることを最初に記しておきたい。

本論文は主に2009年までにフィールドで得られたデータを中心に論を展開していく。本論文の対象は、リーマン・ショック、急速な全国区へのイベサーの流行やSNSの普及により2009年前後を大きな転換期として、所属している人間たちの行動様式、そして所属する人間たちの学歴等を大きく変化させた。また、本稿で述べる彼らの価値観はその後の世代にも通底するものであるということは、著者の他の報告や、他の論者の研究(Saladin 2011)などでも明らかになってはいるものの、逸脱性は本稿で述べる段階よりもかなり低くなり、そして社会階層も異なる。そのため、本研究では高学歴者が多く所属し逸脱性が高いサブカルチャーに着目するため、2009年までのイベサーに着目して研究を行う。

なお、本稿は平成19年度慶應義塾大学政策・メディア研究科に提出した修士論文、「イベサー」のエスノグラフィー-ストリートを「学校」と捉える若者達-を加筆修正したものである。本稿では、前述した修士論文と、それをもとにした著書「ギャルとギャル男の文化人類学」(荒井 2009)等、2009年までに自ら収集したデータを使用しつつ、その後新たに得た理論的な枠組みを軸に再検討していく。

3. 先行研究

3. 1 系譜となる先行研究

本研究は、初期シカゴ社会学派、バーミンガム学派のユース・サブカルチャー論、そしてバーミンガム学派以降の、いわゆるポストサブカルチャー研究の系譜につながるサブカルチャー研究である。

本研究の系譜に連なる初期シカゴ社会学のサブカルチャー研究は、一種の逸脱研究、犯罪学の研究として始まっており、ギャングや犯罪者、ダンスホールで働く女性、移民といった主流集団に属さない人々の文化を参与観察やフィー

ルドワークによって独自の価値体系を持つものとして描いたものだった。本研究でサブカルチャーと呼ぶものは広い意味ではこの文脈においてである。

バーミンガム学派のサブカルチャー研究は、ポール・ウィリスの研究(1977)などにも見られるように、シカゴ社会学のエスノグラフィーなどの手法を引き継ぎながらも、当時の構造主義、ポスト構造主義、そしてなによりも記号論の影響を受けつつ、サブカルチャーに積極的な意味を見いだそうとしたものだった。特に階級、ジェンダー、人種やエスニシティを分析因子としながら、主流の文化に対する交渉や抵抗の契機をサブカルチャーに見いだそうとしたのである。とりわけ、スタイルや音楽、ファッションを通じた意味の破壊転覆を論じたディック・ヘブディッジの『サブカルチャー』(1979)は、バーミンガム学派のサブカルチャーの代表的なものであり、これらの研究の蓄積の上に本研究も成り立っている。

しかし成美弘至(2001)によると、このようにサブカルチャーのスタイルからイデオロギー闘争の表現を読み込むサブカルチャー研究から、ポストサブカルチャー研究と呼ばれる、フィールドワークに回帰し、当事者の主観的な意味づけや解釈を重視するアプローチをとるサブカルチャー研究の流れがその後生まれてきており、本研究もこの研究の系譜に連なる。特に本研究が連なるのは、ピエール・ブルデューの理論に依拠し、サブカルチャー資本概念を提唱した、サラ・ソントンの研究(1995)である。この研究でソントンは、サブカルチャーに関する知識の多寡がサブカルチャー界の内部での尊敬を集めヒエラルキーの高位に自らを導くのみならず、サブカルチャー産業での経済的な報酬を得られる資本となるという、サブカルチャー概念を提唱した。本研究ではこのソントンのサブカルチャー資本の概念を日本のユース・サブカルチャーに照らし合わせ、より拡張して捉え直したい。

3. 2 研究の直接的な系譜

それでは、日本において行われてきたサブカルチャー研究の系譜と方法論、問題意識を共通する研究をみてみたい。日本においてこれらの研究は、階級や人種、ジェンダーの問題ではなく、何よりも「世代」の問題として扱われてきた。

日本のユース・サブカルチャーの社会化に関して一定期間継続してフィー

ルドワークを行った先行研究には、暴走族に対してフィールドワークを行った佐藤郁哉と大山昌彦の研究が代表的なものとして挙げられる（佐藤 1984, 1985;大山 1998）。本研究の最も直接の先行研究となる両者の研究では共に、暴走族などの逸脱集団に属していても、卒業儀礼を経た後、当事者たちは悪徳を無くし、就職と結婚を軸とした道徳的な生活に落ち着いていくということが述べられている。また、悪徳が将来の社会的成功に結び付くとは捉えておらず、むしろ繰り返すべきではないものとして当事者たちは認識していると捉えられている。

だが、これらの研究がおこなわれた時代と現在とでは、時代背景・若者が社会から受ける影響がともに大きく異なり、また対象の属性の違いも大きい。佐藤・大山の研究対象は最終的に地域社会で働き、生活を営む学歴が低い傾向にある若者であり、ライフコースが限られた若者たちである。それに対して、本研究の対象であるギャル・ギャル男は、地域社会での労働や定住に縛られることもなく、また大学進学者、もしくは大学進学予定の高校生が中心である。そのため、学歴も高く、それにともない選り取りのライフコースもともに異なるというように大きく異なる属性を持つ。以上の違いがあるため本研究では、今までは異なる知見が見いだせるのではないかと考えられる。

では、ギャル・ギャル男を対象とした研究を見てみよう。ギャル・ギャル男に対する継続的なフィールドワークをした研究は行われていない。また、調査の手法も基本的には文献調査、あるいは短期間の調査にとどまるため、社会化の様相を継続的に把握することは困難である。本研究では、短期間では断片的にしか捉えられていなかった当事者たちの活動を、長期的なフィールドワークを行うことで連続的に見ることにより、新たな意味付けを明らかにした。

例えば、宮台真司（1994）は、1990年代初頭の援助交際するコギャルの行動を学校化した社会からの逃避と解釈したが、本研究の対象となるような繁華街にたむろする若者の集団に関しては、あえて詳しい考察から外している。また、2000年代半ばまでにおける研究では本研究の対象者と重なるガングロギャルの若者を、三浦展（2001）は、階層上昇志向の低い若者たちとして捉え、その後の調査の中で実は彼らが階層上昇をしたものもいたらしいと、自らの解釈では読み解けていなかった状況について報告してはいるものの、そこから踏み込んだ内実に関する詳しい分析は行わなかった。また、海外の研究者では、シャ

ロン・キンセラもガングロギャルの若者に対する分析を行っているが、彼女達のファッションから反抗を読み解いている (kinsera,2005)。

他のギャル文化を取り扱った研究の中でも、ギャル・ギャル男的な価値観を自己実現および社会的成功のために必要な要素としてとらえ直した研究はなされておらず、近年のギャルやギャル男を表象の側面からとらえた研究においても、本稿で述べるようなギャル・ギャル男の社会化に着眼した研究を行われてこなかった。

ここまでいづれも優れた先行研究を見てきたが、本研究ではそれら先行研究と大きく異なる知見を得る事ができた。詳細は後述するが、端的に述べると、このユース・サブカルチャーズのメンバーは、サブカルチャーを通じて得た勤勉さと禁欲さそして、悪徳を資本として捉え、その資本を活用することが、将来の一般経済社会における成功に結びつくという希望を持っているという点である。

4. 本研究において依拠するブルデュー理論の概要

まずはじめに、本研究で扱うブルデューの概念について、多田治(2011)の解釈を参照しながら説明を行いたい。本研究ではブルデュー理論の中でもとりわけ、資本、界、ハビトゥスの3つの概念を扱う。まず、資本について述べるが、ブルデューの理論において資本とは、経済資本のみを指すものではない。

資本は、①ハビトゥスとして身体化された特性②貨幣や文学全集のように客体化された物体。③学歴や資格など制度的に保証された資格といった様々な形を取る。資本には、経済資本、文化資本、社会関係資本、象徴資本など、様々な種類があり、特定の界の中で価値の高い資本をもつほど、その個人は界の中で権威ある高い地位を与えられる。

界とは、人々の社会的位置の配置構成である。近代社会は相対的に自立した界に分化しており、個々の界は他には還元されない固有の実践的な論理を持つ。ブルデューは界を、プレイヤーたちのゲーム空間として導入している。この界の中で人々は価値を与えられた財=掛け金を求めて闘争する。この中で手持ちの有効な特性が資本である。

そして、この界に参加しているプレイヤーは、ゲームのセンス=実践感覚を

備えている。ブルデューは、行為者が身体化している無数の状況に対応可能なこのセンスをハビトゥスと呼ぶ。ハビトゥスとは、社会関係の中で形成された身体能力であり、プラティック（実践）=外的に行う行為と、表象=主観的な知覚・評価作用の両方を生み出し、かつ体系的に組織化されていく。以上、多田の解釈をもとに、本論文で扱う主要な概念について説明をしてきた、それでは分析を行っていききたい。

5. イベサーの概要

本研究の対象となる、イベサーは、日本のユース・サブカルチャーズの系譜に属する集団であるが、特に強い関わり合いを持つのが、都内の有名大学を中心としたインカレのイベント系サークルと、その後輩である都内の有名私立高生から構成される渋谷カジ族やチーマーであり、本研究の対象となるイベサーの元となる集団である。このインカレイベントサークル文化と、ユースギャングのチーマー文化が混ざり合い、渋谷センター街を起点に活動を行うイベサーとサークル界が形成された。

本研究ではこの渋谷センター街のイベサーを対象に研究を行う。それでは、このイベサーの特徴について述べていきたい。イベサーは、イベントの企画運営や様々なトラブルに対応するため暴力団と交渉できる人間を「ケツモチ」という名の管理者として置くという特徴をもつ。また、同一の「ケツモチ」を付けているサークルが系列と呼ばれるグループを構成する。そのためサー人はケツモチを尊重し、その対価の一部として、彼らが管理するクラブイベントに参加することや、彼らを通じてクラブを予約することを通じて、彼らに対して納金を行い、時には彼らの仕事に対して協力をすることになる。

ファッションや、価値観、行動様式に加え、このような「ケツモチ」を付けていること、そして「ケツモチ」が複数人集まって主宰するイベサーの合同イベントに参加するということが、イベサーと他のイベントを行う団体との違いとして挙げられる。そして、この合同イベントを主催する「ケツモチ」をつけているサークルのみを彼らはイベサーと呼ぶ。

現在まで続くイベサーの合同イベントは1995年に始まり2009年のピーク時には全国47都道府県で行われた。だが現在では開催する都市を大幅に減らし、

東京、といくつかの主要大都市で行われるように規模を減少させ、2016年現在、東京の「大サー」（後述）は消滅した。

東京都のイベサー界は、「大サー」と呼ばれる大学生位の年齢のメンバーが中心のイベサーと「youth」と呼ばれる高校生位の年齢のイベサーの二つがある。（また、女子のみで構成されるイベサーを「ギャルサー」と呼ぶ。）そのためこの組織の加入者年齢の中心は15歳から22歳（高校一年生位から大学三年生位まで）の若者となっている。彼らは高校三年生、もしくは大学三年生の年齢になると、単独イベントにおいて、引退式という「卒業」の儀礼を行いこの世界から抜けていくといった特徴を持っている。

また、彼らの活動は、サークル界の中で威信を集めること。そして、彼から見てもクールな人間たちにより多く自分たちの単独のイベントに集客すること。合同イベントにおいては、多くの納金をし、パンフレットで前の方に大きく取り上げられ、自分たちのグループやメンバーが高い役職に就けさせること。このようなことを通じてサークルの力を示すことが活動の基本的な目的となっている。

最後にこの研究対象の偏りと特徴について述べていきたい。対象者達は東京都、渋谷を中心に活動拠点を置くメンバー達である。東京には学歴や家庭環境に恵まれた家庭が形成する若者不良文化が根付いているため、本研究の対象者達の大半が、高校生、大学生という立場であり他の都道府県のイベサーに所属するメンバー達と比べ、フリーターや仕事をしているメンバーの割合が低い。そして、家庭が裕福で中高一貫校出身者、高い偏差値の学校など、他の地域に比べ出身階層が高いメンバー達が中心となっているという、偏りおよび特徴がある。

6. イベサーの価値観と資本

本節では、サー人達がどのような重要な価値観を持ち、そしてそれを将来との連続性の中で捉えているのかを明らかにしていく。サー人の中には、単に遊びとして所属しているメンバーも少なくないが、中には非常に意識的に、サークルでの経験が、将来の自分の資本になると考えているメンバーもいる。以下では、その価値観と、サー人がいかにそれらを自分たちの将来と結びつけてい

るのかを明らかにする。

6. 1 勤勉な人付き合い〈シゴト〉と資本

まず、述べるのが〈シゴト〉という行動および、価値観である。サー人達はサークルのために行う行動全般をシゴトと呼ぶ、シゴトには、クラブイベント自体に関わる仕事も含まれているが、もっとも重視されることは人付き合いである。サークル活動に結び付いた、コミュニケーション活動全般のことを彼らは、〈ナゴム〉と呼ぶ、ナゴムことは、自分たちの集団に対してはサークルの規模の維持、つまり集客力と納金力の維持のため、他サークルに対しては集客やトラブル回避のため、ケツモチに対しては安全の確保ため、客に対しては集客ため、と様々な形で必要不可欠なものとなる。

彼らにとって、ストリートの縄張りにたむろし、談笑し、ナンパをしたりすること。幹部のメンバーが他のメンバーに対してこまめに電話をかけること、親睦会に参加すること、飲みに行くこと、遊びに出かけること。サークル活動に関わるこのようなコミュニケーションは基本的に全てナゴムこと、すなわちシゴトと結びつけて考えられる。

また、このようなナゴムための作法は、サー人の先輩から後輩に教育され、客とのこまめな連絡の取り方や、他のメンバーの繋ぎ止めかたなど、多岐にわたる。特に、他サークルやケツモチとナゴム際には、一歩間違えると大きなもめ事に発展するので、細心の注意をもって礼儀作法の指導を受ける。敬語の使い方から、名刺の受け渡し方法、乾杯の際年上の人間には必ずグラスを下げることなど細かい指導を受け、実際に、礼儀をわきまえない行動によりサークル間の大きなもめ事に発展することもある。

このように、一見遊びにしか見えない行動を彼らは行うが、それは必ずしも楽しいばかりではなく、時間的、金銭的な負担も大きい。だが、サークルの評価、そして個人の評価を上げるためには、自分自身のプライベートの時間と金銭をサークルのために費やすことが求められ、同時に、勤勉に集団のために労働を行い、利益を与えることが、非常に高い評価を得るのである。

彼らは以上に述べてきたような「シゴト」の経験が、将来の自分の資本となるものとしてとらえている。以下にそのようなことを表す発言を見ていきたい。

「サークル界ってマジでダルイ付き合い多いじゃないですか。楽しんでないわけじゃないんですけど、他サーのイベに行って、ナゴミも行って、上の人との付き合いも多いんですよ。でも、俺はまだ社会人じゃないからわかんないんですけど、そうゆうマメさとか、人付き合いの上手さって、がんばった人は絶対に将来生きてくると思うんですよね」¹⁾

「やっぱ人脈じゃないですかね。人脈は金で買えないけど金を産むって思ってます。イベサーって色んな人いるじゃないですか。バカな奴、頭良い奴、不良(暴力団員もしくは関係者のこと)になる奴、自分で会社立ち上げる奴……。Wさんみたいに若くして大企業の社長やってるのって、人脈の力が大きいと思う。良い人脈とワル人脈の両方持てれば、チャンスもあるし、この先いろいろヤくなった時でも大丈夫だと思うんですよね」²⁾

以上の発言のように、彼らはシゴトに根差した生活、およびそのシゴトを通じてえられたものを、将来と結びつけてとらえている。すなわち常に集団に対し勤勉な貢献するというプラティック、このシゴトを通じて得られたハビトゥス、すなわち身体化された特性としての文化資本、そしてそこで得られた社会関係資本が、彼らが想像する将来の一般社会での成功に結びつくと思込んでいるのである。では、次にサークル界特有の経験、およびそれに結びついた価値観がどのように将来と結びつくと思込んでいるのかを見ていきたい。

6. 2 脱社会性<ツヨメ>と資本

まず述べるのが、〈ツヨメ〉である。これは、脱社会性に結びつく価値観および行動である。極端に目立つファッションや行為など、既存の枠組みを超えた非常識な発想と行動がツヨメであるとされ、評価される。

まず、ライフスタイルの側面では、「場面」と呼ばれる場当たりの非常識な生活が、ツヨメであると評価される。例えば、徹夜で遊び回る、何日も友人宅や異性の家を泊まり歩くこと。そして同時に、高学歴であることや、学校に行ったり、資格試験勉強や就職に有利になる活動、サークルのシゴトなどやるべきことはきちんと行っているという点で、自堕落ではないということが評価される。すなわち社会通念上のイメージや生活と、かけ離れれば離れるほど、

ツヨメとして評価されるのである。

そして行動の面では3つの評価要素がある、1つ目はファッションの要素である。ひときわ目立つファッション、新規性のあるファッションをすることがツヨメである。第2の要素は、オワッツと呼ばれる要素である。これは下品さや、不潔な要素を含んだものでありかつ笑える行動のことを指す。第3の要素は、ヤケと呼ばれる要素である。〈ヤケ〉とは、身体的、社会的危険性を伴う脱社会的な行動、露出行為などのことである。「自棄」としか思えない行動のことを指す。

このような脱社会的なライフスタイルおよび行動も彼らはこれをキャリアと結びつけている。イベサーには引退者達の武勇伝が広がっており、サー人時代からの常識外れな行動力を見込まれて大手広告代理店、マスコミ、音楽業界などに就職した人間の話などはよく懂れとして話題に上る。また一般経済社会に出た後も、不規則な激務の生活を送る自分たちの先輩の話や、一流企業の社長の接待の中で、ツヨメなパフォーマンスをしている話などが話題にあがる。先輩たちのツヨメなライフスタイルを送りながら一般経済社会で活躍している話を聞き懂れる人間も多い。また、目立つことによってチャンスや仕事を得られる。と捉える者や、以下の発言にみられるように、新規性のあるものを一早く見極め、ビジネスに応用することが社会での成功に結びつくと思えている者も多い。

「渋谷って流行の発信地だし、そこでイケてる奴らと関わることで、世の中で何が流行っているのか、何がウケるのかっていうのがわかってくると思うんです。そういう敏感なセンスって、単に雑誌とかを見てるだけじゃ身に付けられないんですよ。ITなんかで成功した人もそうじゃないですか。(イベサーにいます) そういう“力”みたいなのが研ぎ澄まされると思うんすよ」³⁾

以上に述べてきたようにツヨメであるということは、脱社会的であるということであるだが、当事者達はそのようなアクションを考えつく発想力や、実際にやってみせる行動力こそが、何より重要であると思えている。そして目立つことが、周囲に対するアピールとなり、新しいものに気がつく、耳目を集めるような行動をとれること、このようなハビトゥスを身に付けること、そして

そのような文化資本を得ることが将来社会的な成功を掴むことに結びつくことと認識しているのである。

6. 3 異性愛の利用<チャライ>と資本

次に、性的逸脱に結びつく<チャライ>という価値観および行動について述べる。この価値観は、異性との性体験の多さ、異性との交遊の上手さなどを指すものである。また、早い時期に奔放な性体験を経験して落ち着くこと、異性愛におぼれず、異性関係のトラブルをうまく避けつつ、異性をうまく利用できることが評価される。

イベントにより多くのクールな若者を呼ぶためには、町中や SNS で異性に声をかけねばならず、彼等の中には OB が経営する水商売、性風俗、アダルトビデオなどのスカウト会社で働く者も多く、女性も派手な外見で短時間で給料を稼ぐためにホステスなどの仕事につくことも多い、そのため、彼等と異性愛は切り離しにくいものとなっている。イベサーにおいては、美意識だけではなく、サークル活動上や他の暴力団関係者とのトラブルを避けるためにも、早目に性的な奔放な時期を過ぎることが求められる。そして、集団のために禁欲的であること、もしくは、表面的には性的に奔放ではないが、異性愛を利用して異性をうまくコントロールし、集客、庇護、利益誘導など、集団や自らに利益を誘導できる人間が高く評価される。

このチャライという能力がどのようにキャリアに結びつくと考えられているのか。これは男女の間に認識の差があるようだ。まずは女性サー人の言葉を紹介する。

「サー人ってプリ(クラ)とか写メ(ール)の盛り方上手い気がする。髪とか化粧とかもそうだし、なんか盛っている女の方が得することおおくない？なんだかんだ盛ってなんぼだと思うし、昔遊んでた方が色々最終的にいい女になれると思う。」^[4]

「サークルやってると、アッチ系(暴力団関係)とか上の人とかの付き合い多いし、エグイこともある。そこをうまく交わしながら、しかも嫌われないように接する能力を身につけていくんですよね。男たちの動かし方もそう。上手く

引っぱってイベにも呼ぶんだけど、『ウタせません・遊びません』みたいな(笑)。こういう力って普通じゃなかなか身につけられないし、将来、自分のショップ(洋服屋や雑貨屋などのこと)とか出したい時にも強いと思う」⁶⁾

「色々みてきたけど、結局、世の中一番金に結びつくのは人の色恋だと思う。男なんて皆大なり小なり下心あるんだから、色気使っても体使っても、オンナを上手く利用したもの勝ちでしょ」⁶⁾

これらの発言からは、美しく自分をプロデュースし、男性たちを上手にあしらいながら、自分の利益を確保する、そのような異性愛をうまく活用する文化資本が、将来も有利に動くと考えていることがわかる。では男性はどのような価値観を持つのか見てみたい。

「クラブとかで、中途半端に遅咲きした社会人とか見ると、本当にイタイな一っと思うんですよ。こんな年齢で女に溺れて、時間無駄にしてるなって。チャライことしてきた人間って、基本的に早めに落ち着くじゃないですか。資格を取ったり、仕事にプラスになるような人脈作ったりすることに時間使うと思うんですよ。女と遊ぶにしても、そこからうまくビジネス関係のパイプを作ったりできる。女性関係に流されないし、遊び方もキレイな感じですよ」⁷⁾

「社長とか金持ちって女好きが多いじゃないですか、うまく女扱えたらハマとかしないし、女をうまく紹介とかできれば仕事もうまく回せると思うですよ」⁸⁾

以上に見てきたように、男性に関しては、チャライ経験を若いうちにしておくことで、「遊び」に対する耐性ができるというリスク回避の方向と、うまく異性を扱うことにより、ビジネス上のメリットを得られるとう期待をしている。佐藤郁哉(1984)はヤンキー文化において不道徳的なライフスタイルを若いころに経験することで将来道徳的なライフスタイルを送ることができるという考え方を、「免疫理論」と呼んでいる。本研究の対象者達もこのような免疫的な効果を期待しているものの、その不道徳さをうまく活用しビジネス上の利益に結びつけようとしている点も同時に含んでいる。キャサリン・ハキム

(2012) はブルデューの理論を援用し、美しさ、セックスアピール、快活さ、着こなしのセンス、人を引き付ける魅力、社交スキル、性的能力などが組み合わさった、外見の魅力と対人的な魅力を総合したものとしてエロティックキャピタルの概念を提唱し、これが資本として機能すること述べているが、サー人にとって、異性愛を扱う文化資本は、佐藤の述べる免疫的な効果とハキムが述べる利益の獲得効果の両方が含まれている、将来に役立つ資本として捉えられていると考えられる。

6. 4 反社会性 <オラオラ>の資本

最後に述べるのが、反社会性に結びつく<オラオラ>という価値観である。オラオラは彼らに関わるギャル・ギャル男系雑誌などでは悪羅悪羅と表現され、男性の場合悪羅悪羅系、女性の場合は悪羅ギャルと呼ばれる。この価値観は見た目が威圧的であること、また、違法行為の知識やグレーな人脈、逮捕などの危険性を避けたグレーな行為、経歴を傷つけない範囲での行為なども指す。すなわち、基本的には反社会的な価値観が根底にあると見てよい。渋谷などの繁華街を主な活動場所とするギャル・ギャル男にとって、オラオラな人物はトラブル対処ができる、法に触れない範囲で金銭を稼ぐすべを知っているといった点から評価の対象となる。

オラオラの価値観の上では、威圧感を与えるファッションをしていることや、そのような言葉遣いや態度、雰囲気醸し出し、悪さや、危険さを周囲に示すことが重要である。また、周囲から畏怖されるケツモチやそのような人間との人脈を持つこともサー人にとっても自分の威信を高めることになる。また、時代の経過とともに数を減らしたものの、サークルOBの関わる、闇金融、詐欺等、の仕事をはじめとした、法律に抵触するストレスの仕事や、違法であるが逮捕のリスクが少ない仕事をするのもオラオラとして、評価基準の対象となり、実際にサー人時代にしたオラオラな仕事を通じて経済資本を得て、ベンチャー企業を起業する者もあり、一つのロールモデルとなってもいる。

だが、彼の中で実際に暴力をふるう人間は非常に少なく、サージン同士のトラブルにおいて暴力が行使されることはあまりない、なぜかという、暴力沙汰を起こすと、その処理に当たるケツモチに貸しを作ることになり、後から様々な不利益を被る可能性もある。また、警察沙汰になれば、社会的な経歴にも傷

がついてしまう。そのため、基本的にはサー人同士で、暴力沙汰になることを避ける傾向がある。そして、実際に揉め事が殴り合いに発展した時、警察が来ても「身内の問題ですから」と、その介入を避けるなど警察などの介入を避けるためのこつも、イベサー内で教育されている。

このように、オラオラの価値観には周囲に悪そう、強そうという威圧感を与えつつも、あくまで逮捕のリスク、そしてそれにとまなう将来のリスクを避けることが重要になる。そして彼らにとっては、逮捕されない範囲で反社会性のある行動をすること重要なため、法律の抜け穴、トラブルを利用して合法的に金銭を得る方法や、違法性のない脅し文句を知っている人間、そのような逮捕のリスクを避けた悪さを利用することが、彼らの中でもっとも威信を高めることになる。

では、彼らはこのようなオラオラが、キャリアとしてどう結びつくと思えているかを見てみたい。

「成功すればするほど、裏の世界っていうか、ワルっぽい人たちとの関係って避けられないと思うし、そういう力も知識も必要だと思うんですよ。どこでも悪どい連中にいいようにコキ使われたり、裏切られて、事業とか失敗することありますよね。イベサーってその縮図みたいなのところがあるじゃないですか。ケツモチとうまくやらないとサークル維持できないけど、かといって何でもハイハイ言っているとまずいことになったり……。それに、こういう悪い連中と渡り合うのって、若いうちにやっておかないと取り返しつかないじゃないですか。四十、五十歳になって『カタはめられました（詐欺などに引っかかる）』じゃ笑えないっすよね」⁹⁾

「SさんとかDさんとかと一緒にいると仕事だけでなく、どうしてもねえ奴まとめたりとか、アブナイ橋をうまく渡って、それでちゃんと成功してる。そーいうのって単に遊んでるだけじゃ見れないと思うんですよ。多少ワルなことも知ってる人間の方がビッグになれるっていうか。そういうことも、まっとうな学歴とか両方とも俺も持ちたいし。それにやっぱその方がカッコイイじゃないですか」¹⁰⁾

以上の発言に見られるように、彼らは犯罪と親近性のある人間との付き合いや、法律のボーダーラインを知ることで将来の自らのリスクを最小化し、自らも多少のワルさを用いることでより出世できると捉えている。すなわち、ユース・サブカルチャーズにおける自らの威信を高めるだけではなく、それをキャリアとして認識し、将来において有効に活用できると捉えているのである。このことは、現在の活動の結果得られるオラオラのキャリアをやはり文化資本として捉えていることがわかる。そして、その将来の目指す姿は、OBのように一般経済社会で成功している人間をモデルとしており、アウトサイダーな世界や、サブカルチャー産業に連なる分野以外での成功においてもそれが生かせるのではないかという期待も同時に表しているのである。

7. イベサーの意味づけ

以上に、サー人の行動原理、および価値観について述べ、そこで得た資本が将来の一般経済社会をも含めた世界で役立つと認識していることが分かった。では、最後に彼らがサークル界をどのようにとらえているのか、そして自分たちの行動をどのようにとらえているのかということをより詳細に分析したい。

彼らサー人は、イベサーを「もうひとつの学校」としてとらえている。引退式のコメントやパンフレットには、「社会全体で見たら小さい社会かも知れないけど、イベサー業界っていうのは、それはそれで一つの社会」「若いうちしかできない貴重な経験ができる学校」このような発言も見受けられ、イベサーを一つの学校や社会勉強の場と捉えていることを示している。

だが、彼らが全く一般的な学校や学歴を軽視しているわけではない、むしろそのような要素を持つことを非常に重視されている。ハイレベル高、ブランド校に通っていることはステータスとして通用し、一定以上の大学に通っていることが信用につながり昇進しやすい。社会と異なるルールによって、サークル界が支配されていると捉えられがちではあるが、実はサークル界内でも、一般的な「社会的経歴」がある程度通用しており、この界自体があくまで相対的に自立しているに過ぎないことを示している。また彼らの大半は最終的には、アウトサイダーとして生きるわけでもなく、またサブカルチャー産業に進むよりも一般経済社会において成功を治めようと希望している若者達である。つまり

彼らは、学歴といった一般社会で制度化された文化資本と同時に、サークル界で得られるタフなコミュニケーション能力や悪徳と結びついたような身体化された文化資本も同時に求めている。

なおかつ、彼らはこれら両方の文化資本を高く持つことを評価し、彼らが名づけるところのギャップがあることを高く評価する。そして、彼らはこの両方の資本を持つことにより、単に学歴資本のみを持つ人間よりも高い能力を持ち、将来一般経済社会でより成功できるのではないかという希望をもっている。

さらに、彼らは、イベサーに参加することにより、以上に述べた文化資本に加え、他では得難い社会関係資本、時には経済資本を得ることを期待している。

そして、引退した先輩たちのように、かつてはアウトサイダーであったが、現在は一般経済社会で成功しているといった過去と未来との間のギャップがある人間になれるという希望を持っている。すなわち、彼らは、過去アウトサイダーであった状態から成り上がり、将来的に一般経済社会において成功するというドラマ性を持った人生を生きることがかっこいいと捉え、またそれはセルフプロデュースに結びつく要素になると捉えている。つまり、アウトサイダーであったという要素はカリスマ性に結びつき象徴資本として将来の社会においても機能するであろうという期待を持っているのである。

8. 終りに

本研究で述べた若者達は、まさに新自由主義的な価値観が支配的な日本社会の時代背景の中で、個性を煽られながら、自由に生き、自ら責任を取ることを当然のこととして求められてきた時代の若者達である。今まで論じてきたように、サークル界にて行われる彼等の活動は、彼らの勤勉さと悪徳を併せ持った文化資本を得ることに結び付く、イベサーという「学校」における彼らなりの学習であると捉えられる。また、そのユース・サブカルチャーズで得られた経済資本、社会関係資本、象徴資本までもが、彼らにとって将来の社会的な成功に結びつく資本として肯定的に捉えていることがわかった。すなわち、少なくとも当事者の若者の社会観に根差した価値観の上では、彼らは従来の先行研究で述べられてきたような、消極的・享樂的、又は社会的自己実現に対する欲求が低い若者とは捉えがたい。また社会に対して反抗するというよりも、将来の

社会的自己実現に向けた「資本」を得るために積極的に活動する、社会に迎合する若者としてむしろ捉える事ができる。これは従来言われていた90年代以降の都市における都市のユース・サブカルチャーズの若者の姿を捉え直すものである。

また、本論文では、ソートンがサブカルチャー資本として挙げているサブカルチャーに関わる知識の多寡やクールさなどの文化資本とはまた異なった側面として、勤勉な人付き合い、反社会性や、性愛の利用、脱社会性に結びつくような文化資本が、現役のメンバー達のサブカルチャー内部でのポジションに影響していること。またそのような文化資本を得ることが将来の社会的な成功に結びつくことと捉えていることが明らかになった。

そして、ソートンは主に文化資本の側面を中心にサブカルチャー資本という概念を提唱していたが、文化資本的な側面に加え、ユース・サブカルチャーを通じて得られる社会関係資本、経済資本、象徴資本といった他の資本も、集団内のポジションのみならず、将来の経済的な収入に結びつくものとして捉えられていることが示唆された。

ブルデューの理論を用いた代表的なサブカルチャー研究では、ウィリス(1979)の研究において、労働者階級の若者が労働者の世界にて、ソートン(1990)の研究においては、サブカルチャーのメンバーがそれと結びついたサブカルチャー産業にて、経済的な収入を得るために、サブカルチャーで獲得した文化資本を生かすという知見は見受けられた。だが本研究のように、一般経済社会においてまでサブカルチャーを通じて獲得した資本が生かされると予測しているという知見は他に見当たらない。この知見は、サブカルチャー内部の上昇に役立つ、勤勉な人付き合いなどに加え、悪徳と捉えられる側面も持つような資本が、一般経済社会においても資本として通用している可能性、そして、社会にサブカルチャー内部で求められているような悪徳性が分かちがたく結びついている可能性を指し示すものである。

引用・参考文献

荒井悠介, 2007, 『「イベサー」のエスノグラフィー——ストリートを「学校」と捉える若者達』平成19年度 慶應義塾大学政策・メディア研究科修士論文.

- 2009, 『ギャルとギャル男の文化人類学』新潮社。
- 大山昌彦, 1998, 「ダンシング・イン・ザ・ストリート——茨城県A市におけるロックンロールをめぐる民族誌」 東京都立大学社会人類学会編, 『社会人類学年報』24, 弘文堂, 29-51.
- 佐藤郁哉, 1984, 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社。
- , 1985, 『ヤンキー・暴走族・社会人』新曜社。
- 多田治, 2011, 『社会学理論のエッセンス』学文社。
- 成美弘至, 2001, 「サブカルチャー」, 吉見俊哉編, 『カルチュラル・スタディーズ』講談社, 93-122.
- 難波功士, 2007, 『族の系譜学——ユース・サブカルチャーズの戦後史』青弓社。
- 三浦展, 2001, 『マイホームレス・チャイルド——今どきの若者を理解するための23の視点』クラブハウス。
- 宮台真司, 2000, 『まぼろしの郊外』朝日新聞社。
- Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit. 石井 洋二郎 訳, 1990, 『ディスタクシオン——社会的判断力批判』1.2., 藤原書店。
- 1980, *Le Sens pratique*, Paris: Éditions de Minuit. 今村仁司・港道隆・塚原史・福井憲彦訳, 2001, 『実践感覚』1.2., みすず書房。
- Hakim, Catherine, 2011, *Honey Money: The Power of Erotic Capital*, London: Penguin Books Ltd. (=2012, 田口未和訳, 『エロティック・キャピタル——すべてが手に入る自分磨き』共同通信社.)
- Hebdige, Dick, 1979, *Subculture: The Meaning of Style*, New York, Routledge (=1986, 山口淑子訳, 『サブカルチャー——スタイルの意味するもの』未来社.)
- Kinsella, Sharon, 2005, 「ギャル文化と人種の越境」, 土佐昌樹・青柳寛編, 『越境するポピュラー文化と＜想像のアジア＞』めこん, 43-71.
- Saladin, Ronald, 2011, 「ギャル男雑誌に描かれるジェンダー」『ソシオロジスト』13, 武蔵大学社会学会, 197-230.
- Thornton, Sarah, 1995, *Club Cultures: Music, Media and Subcultural Capital*, Cambridge: Polity Press.
- Willis, Paul, 1977, *Learning to Labour: How Working Class Boys Get Working Class Jobs*, London: Ashgate Publishing Ltd. (=1996, 熊沢誠・山田潤訳「ハマータウン

の野郎ども」筑摩書房.)

- (1) Aさん 男性 2006年9月30日インタビューより
- (2) Bさん 男性 2006年9月29日インタビューより
- (3) Aさん 男性 2006年11月3日インタビューより
- (4) Cさん 女性 2006年10月14日フィールドノーツより
- (5) Dさん 女性 2007年5月13日インタビューより
- (6) Eさん 女性 2008年5月3日フィールドノーツより
- (7) Fさん 男性 2006年10月14日インタビューより
- (8) Gさん 男性 2007年5月3日フィールドノーツより
- (9) Hさん 男性 2006年10月14日インタビューより
- (10) Iさん 男性 2007年6月3日インタビューより